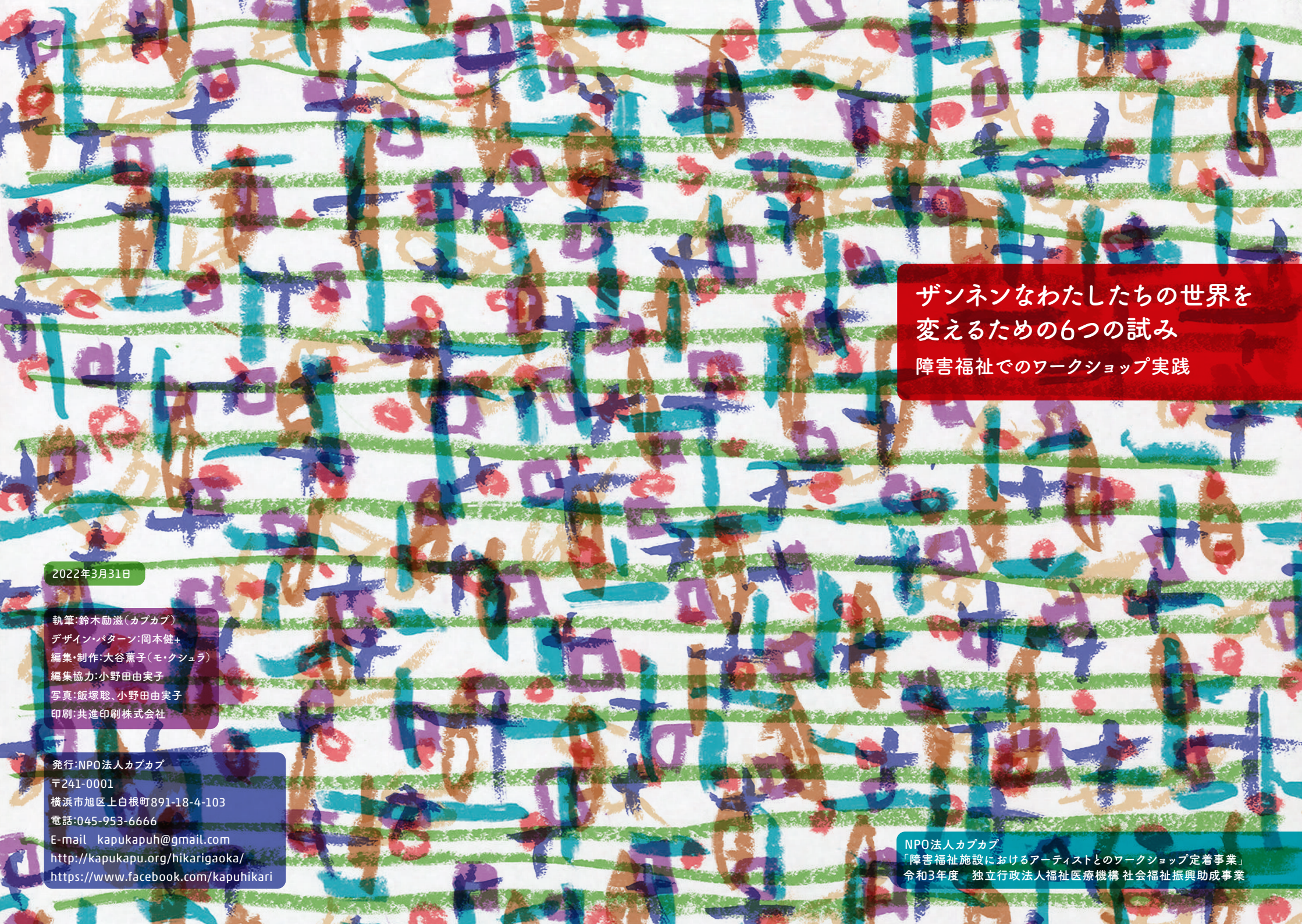


ザンネンなわたしたちの世界を変えるための6つの試み

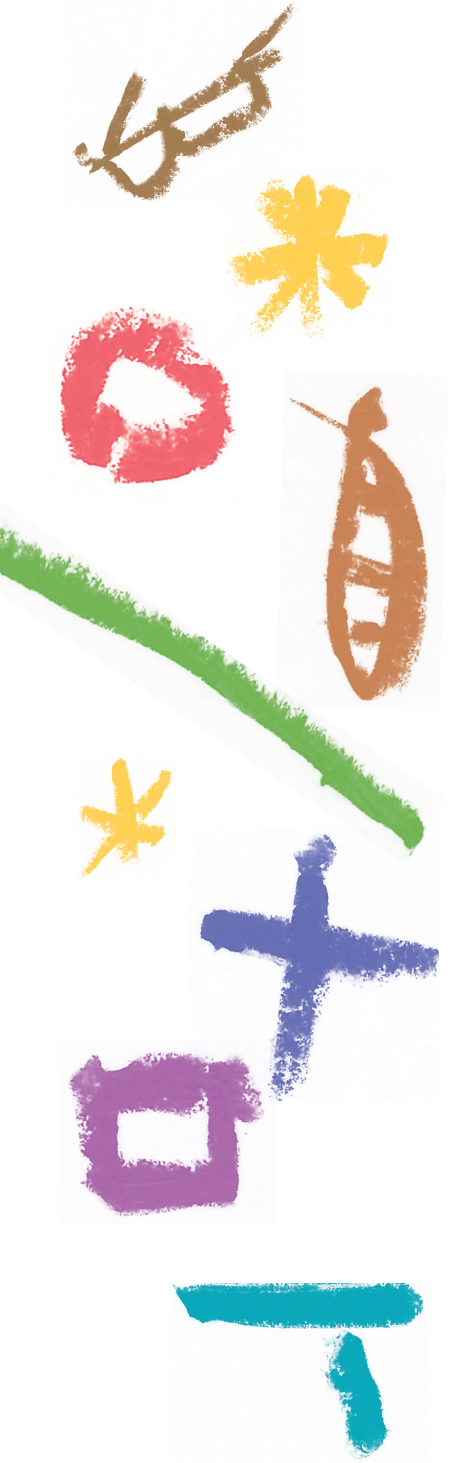
障害福祉でのワークショップ実践

2022年3月31日

執筆:鈴木励滋(カプカプ)
デザイン・パターン:岡本健+
編集・制作:大谷薫子(モ・クシュラ)
編集協力:小野田由実子
写真:飯塚聡、小野田由実子
印刷:共進印刷株式会社

発行:NPO法人カプカプ
〒241-0001
横浜市旭区上白根町891-18-4-103
電話:045-953-6666
E-mail　kapukapuh@gmail.com
http://kapukapu.org/hikarigaoka/
https://www.facebook.com/kapuhikari

NPO法人カプカプ
「障害福祉施設におけるアーティストとのワークショップ定着事業」
令和3年度　独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業



02
この企画の背景について　カプカプ所長・鈴木励滋

06
本書で紹介する6つのワークショップ・メニュー

08
実施レポート……1
アサダワタル×サポートセンター連
れんらじお

12
実施レポート……2
白神ももこ×まどか工房
まどかダンスふたたび

16
実施レポート……3
新井英夫×ミコミコカンパニー
新井一座フルコース

20
実施レポート……4
岩井秀人×むくどりの家
むくどりのモロモロ

24
実施レポート……5
益山貴司×活動ホームあさひ
ボス益山アワー

28
実施レポート……6
山本卓卓×ほわほわ
ほわほわのぷりぷり

32
障害福祉施設における
アーティストとのワークショップ実施のコツ
福祉施設・アーティスト、それぞれの視点から

40
台本「ほわほわのぷりぷり」山本卓卓

あとがき

はじめに

2016年の今ごろ「ザツゼンに生きる」という、カプカプでの実践がつまった本ができました。サブタイトルは「障害福祉から世界を変える」。だいぶ大風呂敷を広げたものです。書誌コードもつかず、一般の書店にも流通しないそんな本など彼に届くことはなく、その夏に事件は起こりました。あれからずっと、どうすれば「障害福祉の世界を変える」だけでなく、その営みを通して「障害福祉から世界を変える」ことができるのだろうかと試行錯誤しています。その一端がこの「障害福祉施設におけるアーティストとのワークショップ定着事業」という試みです。

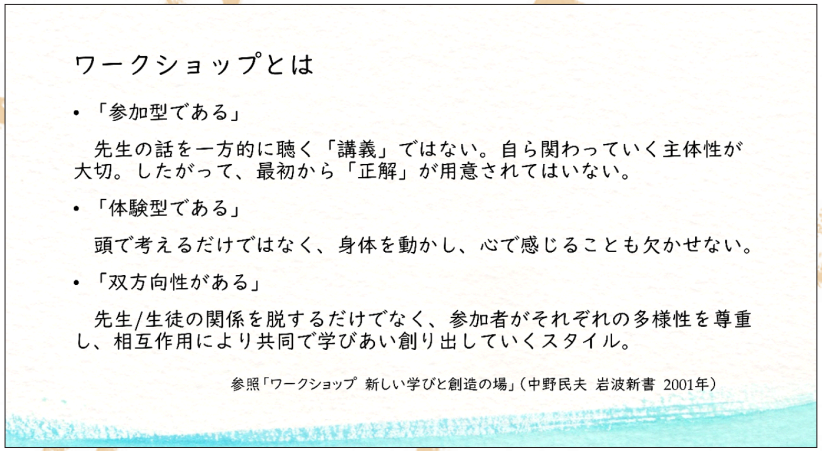
コロナ禍は人々を分け隔て、差異は生きづらさとなり、殺さないでという声は届かない、相も変らぬ世の中ですが、それでもなお愚直にすべての人の幸いを願いつつ小さな本を編みました。

2022年3月

◉カプカプってどんなとこ？
1997年に地域作業所として横浜市旭区に開設し、2009年にNPO法人化したのち、2017年から制度上は生活介護事業所となりました。旭区上白根町にあるUR西ひかりが丘団地の商店街で、喫茶やらお菓子づくりやら、絵を描いたりちくちく縫ったりリサイクルしたり唄ったり踊ったりラジオやったり世話焼いたり焼かれたりという「カプカプ」でございます。緑区に「カプカプ竹山」都筑区に「カプカプ川和」があり、総勢60名近い人が通い、愉快な日々を送っています。

この企画の背景について

カプカプ所長・鈴木励滋



前提としてのワークショップ

WAM（独立行政法人福祉医療機構）の「社会福祉振興助成事業」に申請した「障害福祉施設におけるアーティストとのワークショップ定着事業」が採択されて、2021年5月27日にまず参加者を募るために旭区内の障害福祉事業所への説明会を催しました。

そこで最初に見てもらったのがこのスライドです。ワークショップは「講座」とか「教室」ではなくて、だからアーティストも「先生」として招くのではない、ということを大前提として確認したかったのです。わたしたち障害福祉従事者は「訓練」的発想をついつい持ってしまうものなので。

小一時間そんな話をしましたが、理屈で伝えられるものは限られているし、実際に身体を動かすなかで五感を通じて得心してもらうことが重要だとも思っていました。それでも、まずは参加したいと思ってもらえなくては始まらないので、わたしの現場であるカプカプでのワークショップで、メンバーさんたちが活き活きとそれぞれの表現をしている様子も写真で見てもらいました。

アーティストによる障害福祉施設でのワークショップって？

この企画のモデルはカプカプでの3つのワークショップです。2011年から、画家で絵本作家のミロコマチコさんと絵を描いたり、なにかつくったり。体奏家の新井英夫さんたちと踊ったり演奏したり。2018年からは、文化活動家のアサダワタルさんと喋ったり唄ったり。コロナ禍でもオンラインや屋外での実施などの工夫をしつつ、ずっと続けてきました。

いずれのワークショップも、カプカプに通うさまざまな障害があるメンバーたちだけでなく、スタッフたちの「表現に対する感覚」をひらいてくれるものです。アーティストはカプカプにいる人たちやそこで起こることのおもしろさを教えてくれます。福祉施設ではえてして「指導」の対象になってしまうような言動までも、表現としておもしろがることで否定しなくてよい世界を予感させてくれています。

カプカプで大切にしていること

カプカプのワークショップで大切にしてきたものには、冒頭に示した「参加型」「体験型」「双方向性」以外にも、以下のようなものがあります。

・必ずしも形のある成果を求めなくてよい
・スタッフの「おもしろがる力」を育むこと
・丁寧に時間をかけて関係をつくっていくこと
・イベントというより日常の延長であること
・だれかを否定しない範囲でのなんでもアリ

なぜアーティストによるワークショップが障害福祉施設に必要なの？

なにかが違うことで生きづらさを覚えるのは、その人のせいではなくて社会の側の問題なのだという「社会モデル」が提唱されてかなり経つものの、障害を含むさまざまな差異は個人に、しかも弱い立場の人たちに負わされているのがこの国の残念な現状です。

カプカプではそんな状況を変えていくために、メンバーの一人ひとりが生きていることを存分に表現してもらえるような場を目指してきました。「みんな違っていい（どうぞご自由に。でも、自己責任でね）」ではなく、「みんな違って、それぞれがいい」とだれもが肯定されるような世界に向かって。違うことは恥ずかしいことでも直されるべきものでもなくて、だから、だれかの違いを否定しない範囲において存分に表現してよいという当たり前のことを当たり前にしたいだけなのです。

2016年に「ザツゼンに生きる〜障害福祉から世界を変える」というカプカプの本をクラウドファンディングでつくったのも、そうした世界に向かうための一環でした。そこからのご縁で各地に呼んでいただき、カプカプでの実践のことを話してもきました。一昨年度には、厚生労働省の「障害者芸術文化活動普及支援事業」の全国連絡会議の場でもワークショップのことを中心に話をさせてもらいました。その度に各所から熱い反響があるものの、「ワークショップを始めた」という話はなかなか聞こえてきません。それは一体どういうことなのでしょうか。

障害福祉施設での文化芸術活動、その実施の状況と見えてくるホンネ

厚生労働省の令和２年度障害者総合福祉推進事業「全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査」の報告書※によれば、アンケートに回答のあった8,092ヶ所のうちで文化芸術活動を実施している事業所は41.6%、実施していないのは52.6%（5.8%は無回答）でした。実施していない事業所にその理由を訊くと「施設・団体の事業目的・内容ではないから」という回答が31.9%ともっとも多く、「職員が不足しているから」25.0%や時間が不足しているから」24.7%、そして「障害者にとって文化芸術活動は普段から馴染みがなく、よくわからない（または関心がない）から」も24.7%となっています。

また、「障害者による文化芸術活動で実感している

※ニッセイ基礎研究所（2021年）「厚生労働省 令和2年度障害者総合福祉推進事業
全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査報告書」
（https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000797310.pdf）

成果」という設問と「障害者による文化芸術活動に期待する成果」という設問では、「障害者の趣味や余暇活動の充実、生き甲斐の創出」が突出して高く（それぞれ90.1%と77.6%）、つまり実施の有無にかかわらず障害福祉施設で文化芸術の「成果」はそのようなものと捉えられているということが伺えます。
文化芸術活動は「個人的な趣味」や「余暇活動」で、施設の事業として取り組む必要がない（もしくは余裕がなく優先度が低い）というホンネが見えてきます。

なぜ「身体表現」のワークショップなの？

同じ調査で「実施している文化芸術活動の分野」という設問があります。
その結果は、「美術（絵画、版画、彫刻、工芸、陶芸、書、写真など）」が81.7%と群を抜き、「音楽（合唱、室内楽、吹奏楽、オーケストラ、オペラ、ジャズ、ポップス、ロック、歌謡曲など）」が52.2%と続きます。身体表現は「舞踊（日本舞踊、バレエ、モダンダンス、コンテンポラリーダンスなど）」が8.4%で「演劇（劇、児童劇、人形劇、ミュージカルなど）」が6.2%と、「映画、アニメ映画、コンピュータや映像を活用したアート（メディアアート）など」（13.2%）からも離され、まさに桁違いに少ない実施状況です。

先ほどのホンネとあわせて考えると、こんなことが言えないでしょうか。「美術や音楽は『施設の事業』として取り組むべきものだが、ダンスや演劇は個人的な趣味だ」と障害福祉業界では見なされている、と。
　これは、かつて養護学校や特別支援学校がまだなかった／不足していた時代、障害福祉施設が学校の代わりを担っていたことも関係するのではないかと思います。法律も変わって改称するところも増えてきましたが「〇〇学園」という名前のままの施設は今でもありますし、わたしが仕事を始めた1997年にはまだ、若い職員でも親くらいの利用者さんたちから、「〇〇先生」と呼ばれていました。その名残で古い学校教育的に「美術」や「音楽」を指導することには馴染みがあり、『施設の事業』としてもそれらは見なされやすいのかもしれません。

わたしも、この「正解」を「先生」から教えられる「芸術」ってのはちょっと苦手で、近づきたくはありません。うちでも、絵画のワークショップに誘うと「わたし、絵は描けません」という人がいました。物理的に描けないというのではなくて、世の中で「絵」と認められているなにかを指して「そのようなものは描けない」と言っていたのでしょう。わたしも「美術」の成績は惨憺たるものだったので気持ちはよくわかります。ほんとうは「美術」も「音楽」も限りなく自由なものであるはずなのに。
そういう意味では10年前から中学校の必修科目となった「ダンス」もいずれ「施設の事業」と認められやすくなるのかもしれません（すでにスポーツジムと障害福祉施設を掛け合わせた業態が出てきているのですが、それもそんな流れの端緒にも見えます）。

関係性を組み直し、思い込みを突き崩すアートの力

けれども、わたしが障害福祉の世界、ひいてはそれを取り囲む世界そのものを変えるだけの力があると期待を寄せているのは、そのような「正解のある芸術」ではありません。だから「美術」がダメで「身体芸術」がよいと言っているわけでもありません。「成果」のみではなく過程を尊重し、一人ひとりの表現行為の丸ごとを堪能するためには、「正解のある芸術」に囚われているわたしたちがまず、芸術との出会い直しをしなければならないのかもしれません。既成概念を転換し、障害福祉の世界に蔓延する旧態依然とした価値観を払拭しうるアートの力にわたしは期待しているのです。
それなので、身体表現にこだわる必然はないものの、関係を組み直すような場にスタッフも巻き込み、双方向の働きかけの主体の一人にしてしまうのに、演劇やダンスのワークショップは向いていると思っています。作業や訓練と親和性の高い「絵画教室／音楽教室」的なものでは、「指導する側」という思い込みは崩しがたいのではないかとも思うのです。
もちろんミロコマチコさんのように、絵を教えるのではなく、描く悦びそのもので場を満たしてしまえる人もいますし、一方で唯一の正解に向けて訓練するようなダンスや演劇だってありえますが。

福祉の真髄へ向かうワークショップ

私がこの企画を説明するときに掲げた大前提――ワークショップは「講座」とか「教室」ではなくて、だからアーティストも「先生」として招くのではない、というのは、言い換えれば「正解がない」とか「成果を必須としない」ということです。その言葉は、監査や実地指導で国や行政からギチギチに管理されている現在の障害福祉の現場において、不安しかもたらさないのかもしれません。けれども、そんな営みの先にこそ、福祉の真髄がある気がしてなりません。
「福」も「祉」も「しあわせ」を表わすといいます。メンバーさんたちの幸福追求と同時に、スタッフさんたちも余計な管理や指導から解放されて幸せになれるように、このワークショップを仕掛けました。

論より証拠で、長年培ってきた旭区の地域自立支援協議会ネットワークを頼りにやってしまおうと企画しました。コロナ禍でほとんどのイベントが中止になるような状況のなか、6ヶ所の事業所が手を挙げてくれなかったら成り立ちませんでした。ほんとうに感謝しています。
おかげで予想をはるかに超えるさまざまな反応がそれぞれの場所で起こりました。そのステキな光景を、障害福祉関係者にもアーティストにもぜひ見てほしくて、この本はつくられたのです。
それでは、とくとご覧ください。

カプカプ祭りでの新井一座との一幕

カプカプ祭りでのミロコマチコさんの即興ペインティングでの風景

カプカプでのアサダワタルさんのラジオワークショップの様子

本書で紹介する
6つのワークショップ・メニュー

P.08

1

© 加藤甫

文化活動家

アサダワタル×サポートセンター連

れんらじお

12月10日(金)スタッフ:6名、メンバー:18名
1月14日(金)スタッフ:4名、メンバー:12名
2月8日(火) スタッフ:11名、メンバー:14名

▶サポートセンター連
https://www.houmon-no-ie.or.jp/ren/

P.12

2

振付家・演出家・ダンサー

白神ももこ×まどか工房Ⅱ、Ⅲ

まどかダンスふたたび

12月9日(木) スタッフ:9名、メンバー:22名 コラボ:仁科幸(ダンサー)
12月14日(火)スタッフ:8名、メンバー:23名 コラボ:仁科幸
1月11日(火) スタッフ:5名、メンバー:17名 コラボ:西井夕紀子(音楽家)

▶まどか工房
https://yume21.net/?page_id=195

P.16

3

© 阪谷正彦

体奏家

新井英夫×ミコミコカンパニー・カーサミコミコ

新井一座のフルコース

12月27日(月)スタッフ:10名、メンバー:18名　コラボ:板坂記代子(ダンサー)、永井美里 (ダンサー)
1月6日(木)スタッフ:9名、メンバー:16名　コラボ:板坂記代子、はしむかいゆうき (音楽家)

▶ミコミコカンパニー
http://home.catv-yokohama.ne.jp/88/inforest/mikomikotop.html

P.20

© 平岩亨

作家・演出家・俳優

岩井秀人×むくどりの家

むくどりのモロモロ

6月14日(月)スタッフ:6名、メンバー:14名、パートナー:2名
7月15日(木)スタッフ:7名、メンバー:14名、パートナー:2名
9月14日(火)スタッフ:8名 、メンバー:10名、パートナー:1名
10月27日(水)スタッフ:4名、メンバー:15名
12月7日 (火) スタッフ:5名、メンバー:9名
1月7日(金)スタッフ:4名、メンバー:13名

4

▶むくどりの家
http://kiginokai.wp.xdomain.jp/?page_id=1388

P.24

劇作家・演出家・俳優

益山貴司×活動ホームあさひ

ボス益山アワー

5

12月6日(月)スタッフ:8名 、メンバー:16名
12月15日(水)スタッフ:6名、メンバー:16名
1月24日(月)スタッフ:7名、メンバー:13名
1月26日(水)スタッフ:9名、メンバー:15名
2月21日(月)スタッフ:8名、メンバー:16名
ゲスト:新藤江里子 (劇団子供鉅人)
2月28日(月)スタッフ:7名、メンバー:13名
3月29日(火)スタッフ:8名 、メンバー:12名

▶活動ホームあさひ
http://kh-asahi.or.jp/

P.28

© 雨宮透貴

劇作家・演出家

山本卓卓×ほわほわ

ほわほわのぷりぷり

11月26日(金)スタッフ:6名、メンバー:8名
12月3日(金)スタッフ:6名、メンバー:8名
1月14日(金)スタッフ:6名、メンバー:9名
2月4日(金)スタッフ:4名、メンバー:6名
3月4日(金)スタッフ:4名、メンバー:7名
3月11日(金)スタッフ:6名、メンバー:7名

6

▶ほわほわ
https://www.instagram.com/howahowa19420/

実施レポート…1

アサダワタル×サポートセンター連
れんらじお

念願叶った「れんらじお」

数年前、カプカプでのアサダさんによるラジオワークショップに「サポートセンター連」のメンバーのみなさんが来てくれました。メンバーの中にはちょうどその頃、調子を崩していて参加すら危ぶまれた方がいたのですが、「今日は楽しかった。ありがとう」と大満足していたと聞き、ぜひいつか「サポートセンター連」でもこのワークショップを実現したいと思っていました。そして実現したのが「れんらじお」です。

サポートセンター連は、今回の事業に参加している事業所の中でもっとも規模の大きな施設です。所長の白鳥さんは旭区地域自立支援協議会の事務局を取りまとめていたり、旭区の基幹相談支援センターも担っていたりと、旭区の障害福祉の拠点です。

集まるワークショップに盛り立て役の存在あり

今回のワークショップの担当をされた連のスタッフの羽田さんは、一見クールだけれど熱いものを秘めた人で、大きな施設の中でも周りのスタッフに働きかけて「れんらじお」を盛り立ててくれました。

このような企画では、えてして参加事業所が「お客さん」になってしまいがちです。けれど、羽田さんは以前からカプカプのワークショップに興味をもってくださったこともあり、カプカプでのラジオワークショップで使っている「番組表」を模した連独自のものをつくるだけでなく、某テレビ雑誌の表紙みたいなチラシやポスターまで作成してくれました。

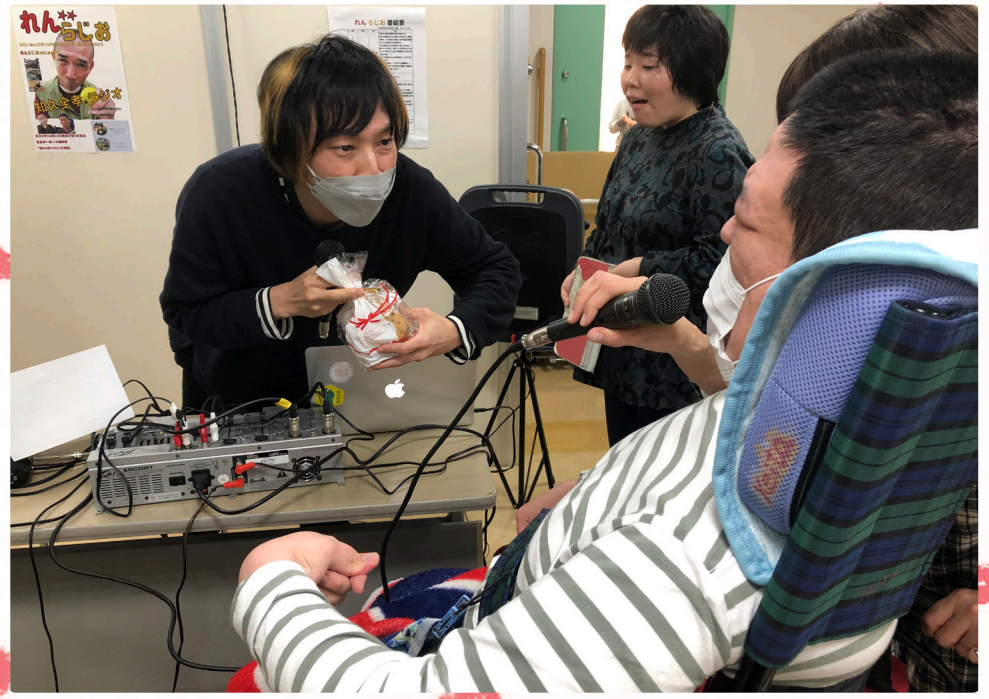
アーティストとスタッフの豊かな出会い

アサダさんは「文化活動家」として、様々な生活現場で音楽などの表現行為を支点に「これまでにない他者との出会い方」の実践をされています。品川区立障害児者総合支援施設「ぐるっぽ」では公立の福祉施設では稀有な「アートディレクター職」を務め(2019～2021年度)、研究者としても近畿大学にて講師をされます(2022年度～)。

カプカプワークショップの理解者であり、あの手この手で場を盛り立ててくださる羽田さんのようなスタッフがいる「サポートセンター連」に、障害福祉現場のスタッフ側の事情にも通じ、多様な差異のある人たちを「表現」でつないで来たアサダさんが出会えば、きっとおもしろいことが起きるにちがいない、そんなふうに思いました。

楽しいが伝播する

サポートセンター連は大きな施設なので、いくつかのグループに部屋を分けてふだんから活動をしています。施設の中で「れんらじお」を始めるにあたり、アサダさんたちはあえてそれぞれの部屋から見える共有のフロアにラジオブースをしつらえてワークショップを重ねていきました。それをふと目撃するなかで参加を熱望する人たちが増えるのは予想していたことですが、「あのメンバーさんに○○について語ってほしい」という「番組企画案」を持ち込むスタッフさんたちまで現れたと聞いて驚きました。本気で楽しんでいるとそれが伝播し、**主体的に**楽しもうとする人が増えていく。すごいことです。



れん らじお 番組表

2022年1月14日（金）１３：００～

時間	番組名	出演	内容
13じ00ふん から 13じ25ふん	ゲームセンターCXに出たい男	市川慶太	「ゲームセンターCX」に出たい男。 市川慶太が自身の好きなゲームを紹介するコーナー！！ 今回はファミコン編と称して、慶太さんが好きな「スーパーマリオ」のゲームを実際にプレイしつつ熱く語ります。何とラジオ原稿は事前に準備済みという熱の入れ様！願いはただ一つ！ 「ゲームセンターCXに出たい」
13じ25ふん から 13じ40ふん	「ひーさん」のリクエスト曲カモーンのコーナー	円浄秀美	皆さまからよせられたリクエスト曲を 「ひーさん」こと円浄秀美がくじ引き形式でご紹介!!
13じ40ふん から 14じ05ふん	教えて！石塚先生 ～相撲編～	石塚和宏	サポートセンター通屈指の大相撲ファン 石塚和宏に大相撲の世界の事を教えてもらおう！ 今回のラジオでは力士の地位やその変動の仕組みについて教えてくれるぞ！ この番組を聞いたリスナーから一人でも多くの大相撲ファンが増える事を願って…
14じ05ふん から 14じ20ふん	「ひーさん」のリクエスト曲カモーンのコーナー	円浄秀美	皆さまからよせられたリクエスト曲を 「ひーさん」こと円浄秀美がくじ引き形式でご紹介!!
14じ20ふん から 14じ45ふん		楢原大輔	楢原大輔さんが皆さんから事前に募集したトークテーマの中から選りすぐりのテーマについてフリートークを繰り広げます！ 「フリー」なので、何が起こるか予測不可能な番組になる事間違いなし!!!

アサダワタル「振り返り」から

ワークショップで僕がやっていることは別に「アート」でもなくて、「ふだんはできないコミュニケーションのかたちをつくっている」といえるのかなと思っています。「れんらじお」では、ラジオというルールを使ったコミュニケーションのかたちをご提案しているわけですけれど。なぜそんな提案をしているかというと、そのことによって人との関わり方が拡がると思うからです。そこが拡がらないと、「あの人、障害があって言葉が通じないからコミュニケーションがとれない」って思われてしまう。違う回路でコミュニケーションのかたちを試していけば、その人が表現していることが浮かび上がって現れることがある。そこに眼差しを向けることも支援だと思うんです。

アサダワタル「振り返り」から

「発表」するとか「作品にする」ということが「生産性」みたいなことと結びついちゃっているんだろうなって。わかりやすいかたちでアウトプットされて初めてやっている意味がある気がしてしまうというか。でも、いま・この時間を濃厚な質にするということのほうが、現場でやっていくこととしてよっぽど重要なことじゃないかと思います。その結果として、生み出されていくものが外に共有されていくということはあってしかるべきなんですけど。自分たちの取り組みが、そこの順番を改めて点検するきっかけになればいいですね。

「振り返り」からの対話

鈴木（カブカブ） 回を重ねるごとに反響があったそうですね。

羽田 みんなが通るフロアにラジオブースを置いたことで、誰でも間接的にかかわれちゃえたことがよかったと思います。ふとワークショップを目撃した**メンバーさんから、自分も出たい！っていう声がけっこう挙がったり**して、回を重ねるごとに反響が増えた印象です。

鈴木（カブカブ） スタッフのみなさんの反応はどうでしたか。

羽田 メンバーさんのふだん見えていなかった部分を知れた驚きがあったようです。ある方が相撲ファンであることは知っていても、そこまで好きだったの？って分かったり、うちに来る前の経歴が全くわからない方がご自身のことを語られたり。２回目以降は職員も出たり、最後は**職員とメンバーが企画段階からコーナーをつくって出演**、みたいなことも増えて、かなり楽しんでいました。

メンバーの感想

◉楽しかった。機会があればまたやってみたい。曲のリクエストもしたい。中橋さん ◉見ているだけじゃつまらないから次は出たい。青木さん ◉リクエストした曲がかかって良かった。またリクエストしたい。市川さん ◉（リスナーとして参加）面白かった。次は出てみたい。石塚さん ◉リクエスト曲が流れてよかった。鈴野さん ◉楽しそうだと思った。リクエスト曲のコーナーで紹介してもらえるなら聴きに行きたい。安田さん

実施レポート…2

白神ももこ×まどか工房
まどかダンスふたたび

出会いは2020年から

「まどか工房」と白神さんは、本事業の前からつながりがありました。2020年度に神奈川県の「共生共創事業」で、障害福祉施設とアーティストが協働する企画をKAAT神奈川芸術劇場の中野敦之さんから打診いただいた際、両者を推薦してつないでいただいたのです。このときは映像作家の飯塚聡さんとショートフィルム「まどかさんのお弁当づくり」を制作しました。

「まどか工房」は主に知的障害がある人たちが通う生活介護事業所で、「製菓」「喫茶」「弁当づくり」に取り組んでいます。所長の新倉さんの人柄もあって、楽しく仕事をするという雰囲気が事業所にあります。今回のワークショップの担当をされた「まどか工房」のスタッフ、浦郷さんは学生時代（白神さんと同窓と判明！）から音楽活動をしていて、彼以外にも若いスタッフが多い事業所です。

「まどか工房」での ワークショップを続けたい！

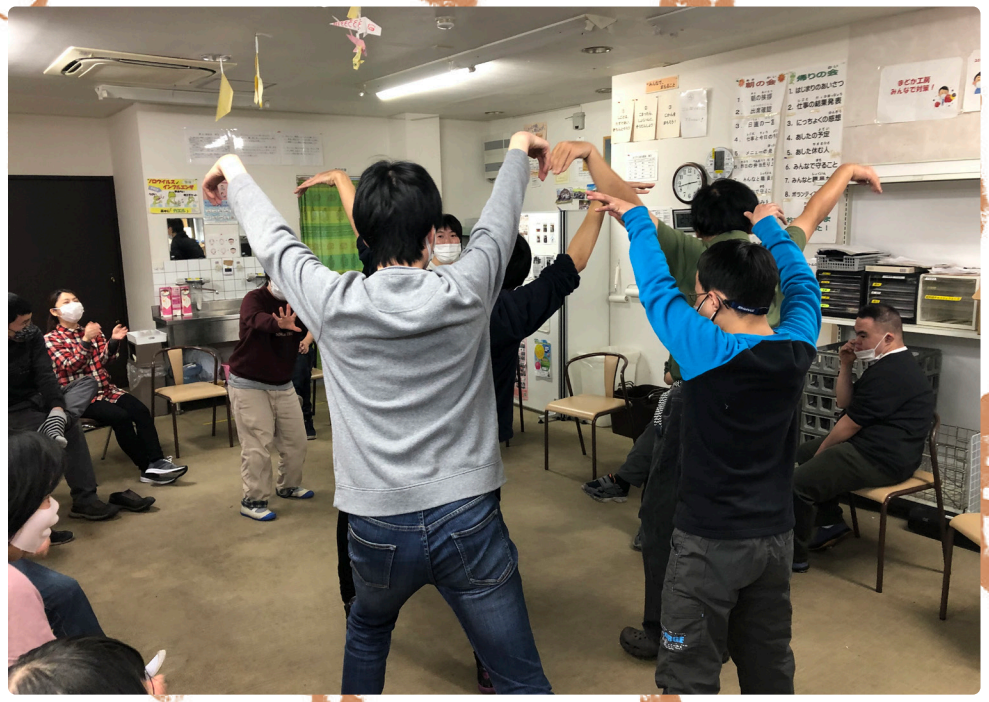
「共生共創事業」での活動が数ヶ月でひと段落することを惜しむ声もありましたが、単年度予算での企画の宿命「あるある」ともいえます。「まどか工房」でのワークショップを続けたい！それが今回、WAM助成に申請したきっかけでした。

「継続」というのは重要なことです。事業所のメンバーには、初めての事や人に慣れるのに時間がかかる人たちもいます。継続するなかで、「なにやら楽しそうだ」とか「コワい先生じゃなさそうだ」みたいに思ってもらうことが大切なのです。

「まどか工房」のメンバーさんの中には、昨年度、白神さんたちが来てつくった自分たちのダンス映像を見て、「参加したかった」という人たちがたくさんいました。今回の事業で、白神さんが再び事業所に来てくれることを知ったメンバーさんたちは、歓迎のポスターを製作して待ってくれていました。

「まどか工房」をパワーアップ

白神さんは、日本を代表するコンテンポラリーダンスの踊り手である木佐貫邦子さんに師事し、ダンス・パフォーマンス的グループ「モモンガ・コンプレックス」を立ち上げ、主宰として全作品の構成・振付・演出をしてきました。立ち上げ間もない2006年に彼女の作品を観たときには「自分はバレエに向いていなかった」と自虐とも呪いともとれる発言もしていましたが、今や「正統」な踊りへの反発を遥かに超え、ダンスとは縁がなさそうな人たちも引きずり込んで根源的な踊りの愉楽を見せてくれています。四国学院大学や桜美林大学の非常勤講師も務め、2019年からは埼玉県富士見市民文化会館「キラリ☆ふじみ」の芸術監督（芸術面の総責任者）です。ダンスや演劇の力を使って市民を巻き込む手腕と、これまで「美しさ」と見なされてこなかった「美しさ」をつくりだす技量は、「まどか工房」をさらにパワーアップさせてくれるはずだと期待しています。



「振り返り」からの対話

鈴木

今回、スタッフの振り返りでのコメントで、「**頑張らなくていい**ですよって白神さんに言ってもらえたのがよかった」というものがありました。福祉には頑張りすぎちゃう方が多いので、白神さんの言葉で肩の力が抜けてよかったそうです。

白神

私たちが活動をしやすいようにいろいろなことを先回りして考えてくださるので、そうお伝えしたんです。
私たちは先生じゃないし、学校でもないので、ワークショップ中、興味がなければ「ない」って言ってくださいとも言いました。そうしたらまたほかのことを考えるので。

鈴木

せっかく来てもらっているのに、メンバーさんの反応が見えづらいと申し訳ないとか気を遣ってるんでしょうけどね。かといって、スタッフがなにもしなくていいわけでもないじゃないですか。スタッフさんはどんな感じでワークショップに参加されたんですか。

頑張らなくていいこと、「正解」はないこと

白神

メンバーと同じ参加者の一人みたいな感じで。ワークショップ中、いちばんとまどっているのがスタッフさん、そんな場面もありましたね。楽器を振られたものの、やったことないよ〜みたいな感じで。

「振り返り」からの対話

鈴木

今回のワークショップを振り返ってどうですか。

白神

いま、「待ってもらう」ということが、なかなかしてもらえてないと思うんです。小学校でも発言が早い、反応が早い人しか受け入れてもらえてないところもあるように思います。
私はみんなが身体で出すものを待つ時間がとても好きなんです。**指導しようとしちゃうと、反応が鈍いなっていう方向で捉えてしまう**んですけど、考えた末に出す一手とか、その一手を出すまでの時間というのはそれぞれなんですよね。そういうことを、今回、ワークショップでも感じています。距離感と時間、それがすごく大事だなと思ってやりました。

それぞれが持っている時間を楽しんで待つ

鈴木

やはり待つことって重要ですよね。なんにでもタイムリミットを決めて「作品」とか「成果」に向かって指導しようとすると当然待てなくなるんです。そのときに特に障害のある人の中にはあぶれてしまう人もいる。だから、**余裕をもって積み重ねていくことの重要性はあぶれる人をつくらない、みたいなことでもありますね**

ワークショップ担当
スタッフ、浦郷さんの感想

◉ふだんダンス類が苦手とするメンバーも比較的すぐに参加することができた。これは以前からの関係が続いている影響で、何をするかイメージすることができた影響が大きいと思います。次回もここから発展させていきたい。（ワークショップ第1回目「ふりかえり」より）

◉1人で完結するのではなく、他者との交流（誰かを助ける、誰かに渡す）という点が取り組みやすさにつながっている。全体をやりつつ、個が生きるようなヒントをみつけたいです。（ワークショップ第2回目「振り返り」より）

実施レポート…3

新井英夫×ミコミコカンパニー
新井一座フルコース

脱力を大切に

2005年、「ミコミコカンパニー」はカプカプの「のれん分け」のようなかたちでスタートしました。開所当初のスタッフは代替わりし、今は佃所長を中心に独自の進化を遂げてきていて、そんな経緯はもはや感じられませんが、多様な場所が点在するほうが選ぶ側からすればよいことなのです。ただ、佃さん以外のスタッフが、まだまだちょっとカタイかなと。マジメすぎるのかもしれません。カタすぎると折れやすく、息詰まるのは「カラダ」も「発想」も同じこと。そこで、脱力を大切にする「野口体操」を立教大学などで教えている、体奏家の新井さんにほぐしてもらえないだろうか、と考えました。

新井さんはカプカプでもワークショップをしてくださっていて、そのときはパートナーの板坂記代子さんと音楽家のササマユウコさんに来てもらっています。ミコミコでは板坂さんのほかにダンサーの永井美里さん（初日）、音楽家のはしむかいゆうきさん（2日目）に入ってもらい、年またぎ新井一座の奥義フルコースを体験してもらいました。

理屈ではなく「体感」から

新井さんは青山学院大学の「ワークショップデザイナー育成プログラム」やJCDN（NPO法人 ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）の「コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクール」でワークショップをつくっていく後進を育てている人でもあります。なので、人を巻き込んでいくのがなんとも巧みです。施設や学校でワークショップをすると、スタッフや教師たちは「生徒／メンバーさんが主役ですから」とか言って傍観者を装いがちですが、新井さんは必ずそういう人を狙って巻き込んでしまう。主体的に「参加」しなければ見えない世界があるし、その人の価値観が揺さぶられることもありません。理屈ではなく「体感」から凝り固まった身体と頭をほぐしてもらって、「いいかげんが良い加減」（野口三千三語録）という言葉がピッタリな佃さんが築いてきたミコミコのよいところを、継いでいく人たちへ手渡す助けにこのワークショップがなるとよいと思って企画しました。新井一座にほぐしてもらったあと、ミコミコでワークショップをお願いしている劇団エンニュイを主宰するお笑いコンビ、クレオパトラの長谷川優貴さんにも、2日間の新井一座のフルコースを体感してもらいました。障害福祉施設でのワークショップの経験はないという長谷川さんですが、福島県の高校生と震災のことを含む自分たちの物語を紡ぐというとても繊細な創作を「平面的な世界、断片的な部屋 いわき総合高校ver」という見事な作品に仕上げた信頼できる劇作家です。

「お笑いをやりたい」というメンバーさんもいるミコミコでのワークショップが、コロナ禍の影響で次年度の実施になりそうですがとても楽しみです。

あるワークショップのタイムライン

13:30 ～

「**手づくりバルーン**」メンバーが席に着くやいなや大きなビニール袋を投げ合う。開始の挨拶や区切りはなく自然と始まる。円中央で新井さんと板坂さんが袋をはじき返す。一気に場が盛り上がる。

「**新井さん、布に包まれて登場**」 新井さんがいなくなり、板坂さんの「どこかな？」の声がけ。新井さんをみんなで呼ぶと、返事のような笛の音が聞こえ、メンバーもざわざわ。奥の部屋から赤い布に包まれた新井さん登場。メンバーに撫でてもらうと鳴き声のように笛を鳴らし、コミュニケーションをとる。

13:45 ～

「**自己紹介**」新井さんが布から顔を出し、自己紹介。参加者、見学者の紹介。

「**タイコで挨拶**」新井さんの太鼓に合わせて手拍子。太鼓を打ちながらみんなのところを廻り、太鼓を差し出して手から始め、肘・頭・足・尻などで叩く。

「**太鼓が止まったタイミングで手を叩く**」円中央でいくつか太鼓を回転させ、最後の太鼓の回転が止まった瞬間に手を叩く。

14:00 ～

「**真似っこ**」新井さんが「頭」や「鼻」などさわるところを言うので、その部位をさわる。言っている部位とさわっている場所が違うなどひっかけも。

「**鈴付きゴムで人間ロケット**」ゴム紐をみんなで持ち、ゴム紐の中に一人ずつ入る。プロレスのリングのようにゴム紐に触れたら押して飛ばす。対角線上に飛ばされる人もいれば、ゴムに沿って円を描くように移動する人などさまざま。

「**即興ダンス**」メンバーと新井さん、板坂さんとペアになり、円の中で即興ダンス。最後に足と足、膝と膝同士をくっつけてポーズ。自然と起きる拍手。見ている人は楽器を鳴らして参加。

14:30 ～

「**花の蜜を吸いに来た蝶**」スタッフには音の鳴る楽器、メンバーはそれを鳴らすバチを持ち、それぞれを花と蝶に見立て、みんなで動き回りながら音を鳴らす。

「**クールダウン**」カリンバの独特な演奏のなかクールダウン。

遅れてきたメンバーさんを音楽で歓迎

14:45 ではまた次回！

※2021年12月27日（月）実施のワークショップより

なぜ、すべてのメンバーさんが楽しめたのか？

職員さんからの「ふりかえり」をヒントに

- 言葉による説明ではなく、動きを見ているうちに自然に参加できた。
- その場に居る誰かの得意・不得意が突出することなく、みんながフェアで居られた。
- 勝ち・負け、上手い・下手がなかった。
- いつの間にかみんなにソロの場面が回ってきて、自分の力で主役になれた。
- 見せ場のないメンバーが誰もいなかった。そのうえすべて自然の流れのようである。
- 「立ち上がる」という行為に対して、いちばん高いところまでゴム紐を上げてみたり、太鼓の高さを高くしたりなど、声がけの仕方が参加者の自然なチャレンジを導いていた。

所長からスタッフへのお願い

ワークショップ中に、メンバーが恥ずかしがったり、固まったりしていても、助け舟を出さずに見守ってください。もどかしくてもどんな反応をするかそれ自体がワークショップの意味なので、見守ってください（と言ってる私が危ない？！）厳守です！ただ大きなパニックや外への飛び出しなどには職員は対応します。どうかスタッフさんは参加の一員として思い切り、自身が楽しんでください。メンバーも喜びますよ！

（ワークショップに際してスタッフに送った所長のメモより）

メンバー・スタッフの感想

◉最初はどうやったらいいのかわからなかったけど、だんだんわかってきて楽しめた。（コナン） ◉どんなことやるのか緊張してとまどったけど、ぜんぶ楽しかった。やってみようかなと思えた。（渡） ◉あ～いうの苦手なんだけど、楽しかったよ。（よね） ◉知らない人がきて緊張した。やったら楽しかった。（宮） ◉太鼓を持ってニコニコしながら歩き回っていた利用者さんの姿は財産。（スタッフ）

◉幻想的で誘われる瞬間があった。相手に合わせる人もいれば、オリジナルの人もいた。いろいろな物語があってハーモニーが生まれた。（スタッフ） ◉ハイになりすぎないかと心配だった。テンションが上がり過ぎないところで止まったので安心した。（スタッフ）

実施レポート…4

岩井秀人×むくどりの家

むくどりのモロモロ

メンバーたちのさらなる多様な表現へ

「むくどりの家」は1982年から精神障害がある人たちの拠り所として、横浜市でもっとも長く活動している事業所の一つです。ご本人や家族ではなく、ボランティアとして活動してきた市民(現・理事長の吉田さんたち)が中心になっているのも先駆的です。これまでにもメンバーさんが自らの抱える生きづらさを仲間に聴いてもらうとか、旭公会堂のホールなどでご自身のことを表現する啓発活動など、施設長の内田さんを中心に取り組まれています。そんな「むくどりの家」なればこそ、メンバーさんたちの表現をさらに多彩にするきっかけにしてもらえればと今回の事業を提案しました。

岩井さんがつくる演劇のふしぎな体験

劇団ハイバイの主宰である岩井秀人さんは、10代半ばから20歳にかけての自身のひきこもりの経験や父親の暴力など、観ているほうが気まずくなるような題材を作品にしてきました。しかも、なんとも要領の悪い人や空回りするくらいの自意識を振りまく人、世の流れに上手く乗っていけない感じの人たちばかりが登場し、目も当てられない悲劇なのに大きな笑いが起こるという作風。そして、なぜか終演後に自分のことを話したくなってしまうという、ふしぎな観劇体験をもたらします。

最近の岩井さんは「新作は書かない」と公言しています。一方で、各地の老若男女が自身の遭遇した「ヒドい出来事」などを書き、自ら出演するワークショップ「ワレワレのモロモロ」に精力的に取り組み、日仏友好160周年を記念した祭典「ジャポニズム2018」での「ワレワレのモロモロ ジュヌビリエ編」も高い評価を受けました。

成果を目指さない

「むくどりのモロモロ」は、カウンセリングなどでも用いられる「外在化」とも通じるので、きっとおもしろいだろうと思っていました。あえて岩井さんにお願いしたのは**「成果を目指さない」**ということでした。助成事業では往々にして「成果」、とりわけ「成果物」が求められます。ただ、初めから「作品づくりありき」になると、そこを意識しすぎて小さくまとまってしまう恐れもあります。他所の打ち合わせでも「必ずしも作品化しなくてよい」と説明しましたが、特に「むくどりの家」のみなさんには「作品化せねばならない」という先入観は遠慮や萎縮につながりかねないので、あえて極端なお願いをしました。

カプカプでのワークショップも「目標」など掲げずに10年以上続けてきています。イベント的なわかりやすい「成果」よりも、日常、そして人生に大切なものをもたらしてくれることは請け負います。その上で、この一見奇妙な企画を、今回のワークショップを担当された「むくどりの家」スタッフの山関さんがおもしろがってくれたおかげで、貴重な場が生まれたのだと感謝しています。当初は「2時間は長い」と言うメンバーさんたちもいましたが、回を追うごとに時間が延びてきています。

第3回 岩井秀人さんワークショップ

日時＝2021年9月14日（火）13:30～16:10
参加者＝18名

やったこと＝「今までの人生の中でつらかったこと」についてのシェア。子どもの頃のつらかった出来事、クリスマスの出来事、サンタクロースがいないと知った日、精神科病院に入院中に保護室に入った時の話、父親のワクチン同行とトイレの話、一緒に暮らす妹と父親と喧嘩した話などが挙がる。「妹と父親の喧嘩」について皆で演じてみた。

演じたエピソード＝「妹と父親の喧嘩」
父親が妹の将来のことを心配し、妹が最近始めた仕事について父親が問うことをきっかけに口喧嘩が始まる。妹が怒って投げたリモコンがTVに当たり破損するが、壊れたTVのことをしきりに心配している父親に対して疑問を感じたというエピソード。

◉以下のメンバーで、父親・妹・姉の役割を交代で演じた。
・Nさん（父親）×山関（妹）×知（姉）
・田山（父親）×山関（妹）×知（姉）
・相原（父親）×山関（妹）×知（妹）
・田代（父親）×アコ（妹）×ゆりこ（姉）
ほか、この話をした当事者本人が父親役も演じた。

「振り返り」からの対話

鈴木（カブカン）
誤解されがちなクセが強めな人に愛のあるツッコミを入れることで、周りの人たちが「その対応、ありなんだ！」っていう場面があったと思うんです。バカにするのでもなく排除するのでも無視するのでもなく、絶妙な言葉のチョイスと語調とで、会話として楽しんでしまう方法をみんなで共有したというか。

岩井
そういうことを僕も自分の演劇を通して知った気がします。**リアルの時はすごく腹がたったり、理不尽に感じたことを、みんなで取り囲んで再現すると、だいたい面白い場面になる**っていうね。それは自分の経験に別の視点をもらうみたいなことにつながっているのかなと思うんですけど。

鈴木（カブカン）
最初はみなさん身構えてましたけど、始まったらすごかったですね。

演劇と救い

岩井
僕にとっては「本番がない」ということがすごく大きかった。それがないから好き放題迷えるし、迷っていること自体をお互いに面白がっていられるんですよ。本番のある「ワレワレのモロモロ」でも、本番よりも**つくっていく過程のほうが参加者にとって大事**だと思っています。クリエーションをするときに自分の体験を人に伝える必要があるから演技をする、みたいなことになるので。

メンバー・スタッフの感想

◉衝撃だった。岩井さんは気づかないことに気づく。泣きそうになった。川上 ◉人間ていうのは個々で重荷を持って生きているんだと思った。岩崎 ◉バッシングがある中で、正直に話す場がない。こういう場がもっと増えたらいい。岩崎 ◉とても楽しかった。岩井さんにもスタッフになってもらいたい。阿久根 ◉抑えられている気持ちや言葉が、どんどん解放されていったらいいなあ。内田 ◉岩井さんの引き出す力、観察力がすごい。田中 ◉岩井さんの皆の話をきちんと拾い上げ応答されていた対応をみて、いち職員としてとても勉強になった。池 ◉ふだん積極的に話さないでいる人も、表現したくなることに驚いた。山関

実施レポート…5

益山貴司×活動ホームあさひ
ボス益山アワー

区の障害福祉の要

「障害者地域活動ホーム」は横浜独自の制度です。成人期の人たちだけでなく、障害がある子どもやその親たちの支えにもなっています。「活動ホームあさひ」は今回参加した事業所の中でもっとも歴史があって、前身である「旭区肢体不自由児者父母の会」から数えると40年近く活動しています。今も昔も旭区の障害福祉の要ともいえるところで、所長の水野さんは旭区地域自立支援協議会の代表です。前身の名前が表わすように、肢体不自由のある人たちが多く通われていますが、さまざまな障害がある人たちにも応じています。事業所は密集を避けるためにも3つのグループに分かれて活動していて、本体から歩いて行き来できる距離に別の2つの居場所をもっています。

安心して過ごせる場だからこその揺さぶり

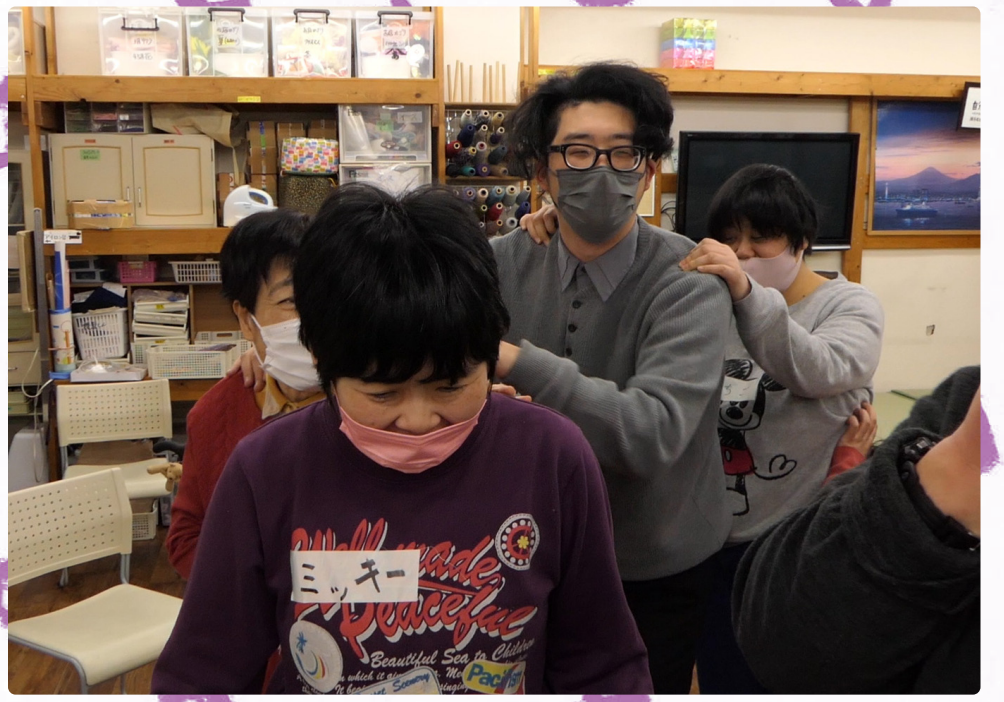
「活動ホームあさひ」には身体的な介助が必要な場面が多いからでしょう、非常勤やボランティアの方たちもたくさんいて、メンバーさんそれぞれのペースで活動しています。みんなが安心して過ごせる場所を長い時間かけて築いてきた「活動ホームあさひ」だからこそ、もっともかき混ぜてくれそうなアーティストをご用意しました。

益山貴司さんは「劇団子供鉅人」代表で、にぎやかな音楽劇から静謐な会話劇まで幅広い創作をする劇作家です。コテコテの関西弁で胡散臭い外見が「福祉界隈」とそぐわない気もするので、ほかの施設だったらためらっていたかもしれません。案の定、今回の事業を提案をするやいなや、あさひのみなさんは益山さんたちがマツケンの後ろで踊る「松屋」の「マツベンサンバ」のCMを作業室でみんなで見て盛り上がったと聞き、「ドンピシャのマッチング!!」と内心ガッツポーズをしました。

おもしろがる力

今回は第3グループ中心となりましたが、ほかの2つのグループでも隔回で、さらにはコロナ禍で在宅に居る人たちとも、先ほどの大きなモニター越しにつなげて実施しました。一人ひとりと寄り添う「活動ホームあさひ」らしいと思います。

意外というか、嬉しい誤算だったのは、担当の渡辺さんを始め、ふだん寡黙に介助しているイメージのスタッフさんたちの芸達者ぶりが露わになったこと。初めてのことに緊張していたメンバーさんたちが大いに楽しめたのは、芸達者なスタッフさんたちのおかげです。スタッフが楽しむことも大切ですが、もっと重要なのが起こっていることを「**おもしろがる力**」。それはマジョリティ（主流派）としての盤石な立場から異なる人を嘲笑うのとは違います。自分も含めてそれぞれが違うことに興味を持ち／感嘆し／敬服するような「おもしろがる力」が鍛えられればそれだけ、福祉の現場で「矯正」されてしまいかねない一人ひとりの差異も「問題行動」ではなく「おもしろい」と捉えなおせるじゃないか。そんなスタッフが増えれば、障害があることが生きづらさになる人も減り、障害福祉施設の「**日常を豊かにする**」ことにつながるはずだと思うのです。



アーティストによるワークショップの意義

障害者地域活動ホームあさひ
施設長 水野智也

導入するときはワークショップをやってどんな効果があるの?って、スタッフ側が先に答えを知りたがるところがあったんですけど、そういうのはなしでやってみましょう、と。枠を外して、それぞれが表現する時間があったほうがいいよねって。
やってみて、「メンバーさんの表現に気づきやすくなった」っていうスタッフの感想がありました。個々のメンバーが感じていることを受信する側の感性をひろげていくことは、支援にとって大事なことだと思います。
先日、益山さんのワークショップでやった「桃太郎」で鬼の役をやったメンバーさんが、ロシアとウクライナのニュースを見て、僕は戦争に行くのかなって言ったんです。そのときはスタッフが、「日本の憲法には第9条というのがあって、戦争はしないんだよ」って応えていました。彼が恐怖を感じとっていることに「ああ、いつものこと」って受け流すか、どんなかたちであれキャッチするかで、支援の差が出てくると思うんです。そしてそれはこちらの感性にかかっていると思いますね。
(「全体の振り返り」より)

笑いで関係性を突き崩す!

「振り返り」からの対話

カブカン 鈴木
メンバーさんは最初、すごく緊張している様子がありましたけど、蓋をあけたらずいぶん違いましたね。

益山
スタッフのみなさんがいなければできなかったと思いますね。ワークショップ中、施設の中里理事長がピアノを弾いて盛り上げてくれたり、自分たちもノリノリで参加してくださったり、スタッフとメンバーさんが一体になって遊んでいく感じがすごくおもしろかったです。「桃太郎」をやったときは、スタッフさんがメンバーからきび団子をぶん投げられたりして(笑)。当然、私よりも付き合いが長いので、それぞれの特性を理解したうえでコミュニケーションをとられている感じが伝わってきました。

ある回で楽器を触わっていたときに、スタッフの方が太鼓を思うように叩けなかったんですよ。私がそこを散々いじるものだから、あるメンバーさんがやめてください!それ以上、いじめないでください!せめていじるなら2、3回にしてあげてください!とか言って(笑)。**メンバーさんがスタッフを助けるみたいなシチュエーション**が生まれて、めちゃくちゃおもしろかったですね。

カブカン 鈴木
あさひでは職員/メンバーみたいな関係ががっちりしていないけど、学校的な傾斜関係がある施設の方にとってその関係が目に見えて崩れるって経験は、ワークショップが終わったあとの施設の時間にとっても、すごくいいのでしょうね。

実施レポート…6

山本卓卓×ほわほわ
ほわほわのぷりぷり

丁寧に関係をつくっていくこと

「ほわほわ」は参加してくれた中でもっとも若い事業所です。2007年に開所した住宅地にある一軒家のまさにアットホームな地域活動支援センターです。母体は高齢福祉も障害福祉もと幅広く活躍している横浜共生会です。所長の佐藤さんの朗らかさのせいなのでしょうか、いつ訪れても楽しそうな雰囲気があり、コロナ禍でみなさんの活動スペースを分散して確保する必要があるため休業していますが、可愛らしい喫茶スペースもあります。

メンバーさん全員が車いすを利用しているという点では、身体表現系のワークショップからもっとも縁遠いとも思われ、福祉系のワークショップに慣れている人に頼もうかとも少し迷いました。

今回の企画で大切にしたいことの一つは**「時間をかけて丁寧に関係をつくっていくこと」**でした。なので、2016年度の演劇系大学共同制作公演「昔々日本」で、都内の5大学から集まった60人以上の学生さんたちと実に丁寧な創作をしていた劇作家の山本卓卓さん（範宙遊泳）に依頼しました。

理想とする社会への表現者による後押し

山本さんに依頼したのは、「昔々日本」が、「津久井やまゆり園事件」への応答としてつくられていたということもあります。その手の作品は少なからずありましたが、あんな凶行に至らせてしまったわたしたちの社会から目を逸らさず、自らの問題として対峙した作り手は稀有でした。「個人モデルから社会モデルへ」、つまり障害を個々人の差異のせいではなく不寛容な社会の側の問題とするという、障害福祉が掲げてだいぶ経ちながらも一向に進めない方へ向かうには、そんな表現者の後押しが肝要だと思ったのです。

こんなふうに言うとカタいワークショップを想像されてしまうかもしれませんが、根底にはストイックなまでの探求心を湛えながら、表に現れるのはどこかユーモラスなのが山本さんの魅力なのです。

関係の積み重ねの先に生まれた物語

話を進める前にまずは「ほわほわ」の人たちに会いたいと山本さんからの申し出があり、スタッフを含めた全員をインタビューするという和やかな時間が持たれました。ワークショップ以外でも、「ほわほわ」のクリスマス会に山本さんが娘さんを連れて訪れるとか、山本さんがノミネートされていた岸田國士戯曲賞のことを気にしたり、受賞をお祝いしたり、ふだんの活動のなかで小道具をつくったり、と関係が積み重ねられていきました。ある時からメンバーさんたちが「すぐるさん」と呼ぶようになったとも聞きます。

そんな関係の積み重ねの先にできつつある物語「ほわほわのぷりぷり」の初稿を、山本さんとほわほわのみなさんのご厚意で本冊子の巻末に掲載させてもらいました。かけがえのない時間を想像しながらお楽しみください。

第1回　11月26日（金曜日）

メモ:ほわほわのメンバーのみなさん、スタッフのみなさんのことを知りたい。

ワーク:インタビュー。1時間10分。
メンバーとスタッフのペア1組ずつにインタビューをする。改まって質問されることで、普段とちょっとだけ違う「少しだけ演じているような状態」の状況を創り出す。

結果:メンバーとスタッフのコミュニケーションのあり方に感動した。スタッフさんたちはメンバーの個性を理解しながら、的確にケアをしつつ、かつ心の通った交流をしている印象をもった。この、メンバーとスタッフの関係、こそが演劇に繋がっていく気がする。ただ、もっともっと一人ひとりを知りたいし、知らなければできない何かがある気がしている。

第2回　12月3日（金曜日）

メモ:みんなを少しだけ演劇の入り口に連れて行きたい。

ワーク:
⓪山本の自己紹介。質疑応答。5分〜10分
①シアターゲームをやってみる。10分。
②小休憩5分。水分補給。
③好きなキャラ・なりたいキャラになってみようを考える。5分。
演技をするうえで、自分が好きなキャラ・なりたいキャラを決める時間を設けたい。ポケモンでもいいし、電車でもいいし、石だっていい、架空のキャラでもいい。

［メンバーの役］
福地さん　メロンパンナちゃん
田中さん　ミッフィー
加藤さん　歌手
田口さん　山本卓卓！
坂本さん　さかたおさむお兄さん（歌のおにいさん）
剣持さん　キティちゃん
渡辺さん　F-1 レーサー
横尾さん　トトロ
山本卓卓　仮面ライダー1号

④好きなキャラ・なりたいキャラになってみよう。30分。
メンバーはそのキャラクターの名前で呼ばれる。スタッフさんはその人がそのキャラクターになれるようにケアをしてあげてほしい。例えば話しかける時に「ピカチュウさん、喉乾いてますか？」「石さん、トイレに行きますか？」など。この時間だけ「役として存在している」という状況を共有する。

③の結果:お互いを違う名前で呼び合うだけで、いつもと違う「演技」の状態になる。朝の朝礼を模して、フェイントを入れながら点呼をとる。田中さん？と呼びかける・・・田中さんは返事をしない。でも「ミッフィーちゃん？」と呼びかけると田中さんが「はい！」と言う。みんなが笑う。これは立派な演技であり、この延長は演劇になりうると感動した。また、参加者によって入り込み方の差はあるが、例えば剣持さんはキティちゃんになりきろうと裏声をつかったり声を小さくしていた。F-1レーサーを演じた渡邊さんに山本が「いまなにしてますか？」と呼びかけると、ハンドルを握るポーズをし、カーブを曲がる手の動き、速度をあげて風を切っているような、イメージの中にいる様をみせてくれてとても感動した。かような経験を経て、やはり最終的に、演劇をつくる、ところまでいくのが一番いいのかもしれないと思った。

第3回　1月14日（金曜日）

メモ:フィードバックの中に「他の役も演じてみたい」とあったので前回と同じことを今度は別の役でやってみたい。

ワーク:
⓪雑談タイム。5〜10分
①シアターゲームをやろう。10分
②休憩水分補給。5分
①の続き
③キャラを決めよう。5分
④キャラに性格をつけよう。5分

［メンバーの役］
福地さん　とってもハッピーなウサギさん
田中さん　いい加減なピカチュウ
加藤さん　めちゃくちゃ強いライダー１号
田口さん　めちゃくちゃ弱い山本卓卓
坂本さん　とっても元気なさかたおさむお兄さん
剣持さん　とってもニコニコな子猫
渡邊さん　とってもニコニコなバイク
横尾さん　とってもうるさい車
上林さん　いつも笑ってるピカチュウ

［スタッフの役］
松山さん　とってもわがままなアリス
谷口さん　涙が止まらない佐藤功気さん！
大槻さん　とってもこわいトランプの女王様
堀江さん　めちゃくちゃ弱い芸能人

⑤キャラの状態で会話や行動をしてみよう。10分

③の結果:
配役決めは、福地さんがサニー姫になりたいと言ったりやっぱりピカチュウやっぱりメロンパンナちゃんと二転三転するのがおかしかった。でもそうした“興味”が、主体的であるための条件なので、福地さんの反応は“クリエイティブの芽”であると確信している。

第4回　2月4日（金曜日）

メモ:残った時間で、コスチュームをつくってもっとそのキャラクターに近づいていきたい。

※なりたいキャラクターが途中で変更されてもかまわない。

ワーク:
①雑談タイム。5分
②シアターゲーム。10分
③休憩水分補給。5分
④キャラの状態で会話や行動をしてみよう。10分
⑤即興劇をしてみよう!!　5分〜10分
⑥役のコスチュームをつくって役に近づこう!

④の結果:
シアターゲーム「見えないボールを回そう」を役の状態でやってみる。子猫は「にゃあ」と言ってボールを投げる。ピカチュウの投げたボールは痺れる。スタッフさんが率先して役になっているのを見てメンバーも楽しんでいた。

第5回　3月4日（金曜日）

メモ:もっとみんなが劇に参加できるように、台本をつかって演劇をしてみる。

ワーク:
①雑談タイム。5分
②シアターゲーム。10分
③休憩水分補給。5分
④台本を読んでみよう。

④の結果:
みんながどんなふうに台詞と対峙できるか未知だったので、半分だけの台本を渡した。読み合わせてみると、ばっちり。1回目の読み合わせが終わったあと、演劇の基礎中の基礎「イマジネーション」について話すと、2回目の読み合わせでは、空間全体が森を意識されているように感じた。この目に見えない確かな変化がとても演劇的だった。

第6回（今年度最後）3月11日（金曜日）

メモ:台本を最後まで読み合わせてみよう!

ワーク:
①雑談タイム。5分
②シアターゲーム。10分
③休憩水分補給。5分
④台本を最後まで読んでみよう!

④の結果:
みんな「演劇をしている」という実感を持てたのではないか。台詞をつかって演技を遊ぶ。演劇本来の原初的な楽しみに触れている感覚があった。
福地さんは積極的にベストタイミングで台詞を発してくれるそして衣装がいい。田中さんは劇が求めているキャラクターとしての振る舞い、を充分理解して上手に演じてくれる。最初、田口さんは照れちゃうかなと思っていたけれど、かなり真剣に、そして楽しみながら魅力的に山本卓卓を演じてくれていた。坂本さんは大好きな「さかたおさむお兄さん」の台詞を、しっかり相手役と疎通をしながら、演技の基本「レスポンス」ができていた。剣持さんは声のトーンを変えて本格的に仔猫を演じ、台詞量の多い役にもかかわらず投げ出したりせず魅力たっぷりにつとめてくれた。渡邊さんはニコニコなバイクという役名にふさわしいその名の通り愛らしいバイクを熱演してくれた。横尾さんは笑っているタイミングから、この劇と物語を充分に理解しているように感じた。スタッフさんたちの演技も充分にプロの鑑賞に耐えうると思った。松山さんは前回より肝が据わっている感じがあって「演劇の道、演技の道へようこそ」と思った。佐藤さんが佐藤さんを演じるというなかなか面白いシチュエーションながら、思い切り演じてくれるので安心してみんなが楽しめた。大槻さんは抑揚や言葉の発し方が巧みで「あ、素人ではないな」と思った。絵本の読み聞かせとか抜群にうまいはず。堀江さんは飄々としていて、役とご本人のお人柄がマッチしている演技にとっても好感をもった。谷口さんは今回はお休みだったけれど、場をエンターテインしてくれる姿勢に感動している。

※本記事は、山本卓卓さんが書き留めたワークショップの記録の一部を抜粋し、山本さんの了解を得て掲載いたしました。

まとめ
当初、メンバーさんだけのためのワークショップではなく、スタッフさん、つまりは「ほわほわ」全体のためのワークショップになるとよいと思っていた。差異なくみんなで「演劇」をつかって一緒に楽しむ空間、場をつくりたかった。今回、その目標は達成できたと自負している。演劇を通して、全員がちょっとした殻をやぶって自分を表現していた。これは、みんながそれぞれの個性を確認し、認め合っていく、尊重し合っていく過程で獲得していったことだ。合計6回のワークショップを重ねた日々のなかに私とみなさんの間にインタラクティブな「コミュニケーション」が存在していた。だから最終的に演劇が立ち上がった。できあがった脚本はこれらの日々の目に見える財産の一つだと思う。このように私の演劇のスキルが応用され、社会にコミットできることをとても嬉しく思う。こうした一つひとつの「社会に参加している実感」が日本中、世界中に満たされていけば、虚しい気持ちのアーティストたちをこれ以上増やさずに済むと思う。福祉に携わる人々においても同じ気持ちであってくれたら嬉しいと思う。

障害福祉施設における
アーティストとのワークショップ実施のコツ
福祉施設・アーティスト、それぞれの視点から

今回参加した6つの事業所、6人のアーティストからの
アンケートをもとに作成しました！

1 ワークショップ実施検討／アーティストの選定

福祉施設の視点

【事業所内で話し合ったこと】

▶ワークショップ（以下、WS）についての理解、その必要性や目的
▶メンバーがなにをしたいか
▶スタッフがなにをしたいか、なにを提供してみたいか
▶期待できる効果をイメージし、施設・職員内で共有

☀「初めて」が苦手な参加者が多い場合は自由度が高いWSがよさそう

アーティストを探す際は、障害者芸術文化活動支援センター（https://arts.mhlw.go.jp/center/）**か、カプカプの鈴木**（奥付の連絡先まで）**にご相談ください。**

2 講師による事業所の見学／事前の打ち合わせ
※Zoom、対面、メールなど

福祉施設の視点

【見学時に伝えたいこと】

▶実施場所、施設の雰囲気、使用できる機材など
▶参加する人の特徴、個々の障害特性・病気など

【打ち合わせで共有したいこと】

▶実施時間、休憩を含むスケジュール調整
▶事業所の時間の流れとその時間内でなにができるか
▶参加者に負担がなく、自由度が高いワークショップ内容が可能か
▶メンバーの障害特性と障害に合わせてなにができるか？
▶アーティストがふだん行なっているWSについて

アーティストの視点

【見学時に知りたいこと】

▶施設の様子、メンバーの障害特性（どのような支援が必要か）
▶ふだんの活動内容（チームワークによる作業か個人作業か）
▶得意なこと、好きなこと
▶障害の個人差（実際に会うことが重要）

【事前の打ち合わせで共有したいこと】

▶実施内容の概要（実施回数、実施時期、参加人数）
▶参加者の特徴（メンバーの特徴に関する資料で共有）
▶実施場所（空間デザインや広さを動画や写真、図面等で共有）
▶WSに期待することやリクエスト
▶WSの担当スタッフ、緊急時の連絡スタッフ

☀実施WSのイメージ共有は映像や写真を使うと便利

3 事業所内におけるワークショップ実施に向けた準備

福祉施設の視点

【事前準備の内容】

▶「期待できる効果」「支援の根拠」の言語化（施設内で理解を得ながら進めるため）
▶参加者（スタッフ、メンバー）、家族に向けての説明
▶WSへの出欠をメンバーに決めてもらう
▶アーティスト来所の周知（ポスターなど）
▶アーティストの紹介（過去作品などを鑑賞）
▶メンバーが不安なくWSを迎えるための準備をスタッフみんなで考えて共有

☀「プラン通りを目指さなくてもOK」というユルさを両者が持っておくといいみたい

4 ワークショップの実施

福祉施設の視点

【配慮したこと】

▶メンバーとアーティスト間のコミュニケーション面でのフォロー
▶支援者ができるだけ見守りに徹し、自らも楽しむ
▶スタッフも積極的に話し、前に出る
▶控室の確保。昼食・休憩など時間配分の調整
▶WS担当スタッフの現場内業務の調整

アーティストの視点

【福祉施設ならではの配慮】

▶身体的な困難がないか、危険はないか
▶NGワードなど（事前に聞き取りした点）

【施設側からされてよかった配慮】

▶メンバーの性格などについてのフォロー
▶途中からの参加、退場自由（メンバーがリラックスできるので）

5 実施後のふりかえり 次回に向けての打ち合わせ

福祉施設の視点

【知りたいこと、話し合いたいこと】

▶メンバーの良かった点、前回からの変化、次回の準備
▶WS後のメンバーの反応、様子
▶WS中のメンバーのふだんとは違う姿、感銘を受けた点
▶WS中のメンバーの発言や行動について補足説明（体調や家族関係、過去のこと等）
▶参加してみて（職員目線での）の感想

アーティストの視点

【知りたいこと、話し合いたいこと】

▶メンバー、スタッフの感想、次回への期待や改善点（プランニングにつなげる）
▶メンバーのWS中のふるまいについて、スタッフ側の所感と目線の交換
▶想定外に良かったこと、悪かったこと、危険はなかったか
▶スイッチの入った瞬間、カオスになった瞬間
▶ふだんの活動にどうつなげるか

その 車の中から、ライダー1号がでてくる。

3 ふはははは！　わたしだ！　ライダー1号だ！

10 えーっ！　ライダーなのに車でー!?

トランプの女王の目がキラリとひかる。

10 いいよね！　英語的にはまちがってないもんね！　ライダーだって車のるよね！　かっこいい！　さいこう！

さかたおさむお兄さんがマイクをもってあらわれる。

5 こんにちは。さかたおさむです。

10 えっまじー！　うたのおにいさんの？

5 そうだよ。ＮＨＫの「おかあさんといっしょ」の7代目うたのおにいさんの、さかたおさむだよ。

10 うそだー！　ぜったいそんな・・・

トランプの女王の目がキラリとひかる。

10 ぜ、ぜったいサインほしー！　ぜったいサインくださーい！

5 いいよー。

12 どうだい、ふしぎだろう？　よくここまでがまんしたね。でもこのさいごのふしぎにはあんただってたえられないさ。ピカチュウ！　10まんボルト！

9 ピカチュー！

10 （しびれながら）2匹目のピカチュウがいるの？　なんで？

トランプの女王の目がキラリとひかる。

10 2匹いたっていいよねー！（きぜつする）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

泣きながら佐藤功気さんがアリスをゆさぶっている。

11 アリス、アリス・・・うう。

10 あれ、さとうさん？　めがさめたんだね？　びっくりしたのよきゅうにたおれたから。

11 なにを言ってるんだよ。森にくるなり、やぶからぼうにたおれたのはアリスのほうだよ。ぼくはずっとこうやってよびかけてたんだよ。しんぱいしたんだぞ。うう。

10 あれ、みんなは？　（森の奥にむかって）おーい、よくも10まんボルトしてくれたな！　この借りはかならずかえすからね！

仔猫がとおりかかる。

10 あっこねこさん、ちゅ～る食べた？　まったく、たいへんだったんだからね！

こねこ、ふしぎそうにアリスをみつめる。

10 ちょっとなんかいいなさいよ。さっきみたいにしゃべってよ。ねえ。

11 アリスがねこにしゃべりかけてる。うう。

10 ていうかさ（もりのおくにむかって）文句いわなかったのにどうしてしめだしたの!?

森の奥から声がきこえる。アリスにしかきこえない。

5 またこんどおいで。

12 もう夜になる。はやく森から出な。

10 なに？　しんぱいしてくれてんの？

7 そうだよ。

2 またおいで。

10 社交辞令じゃないのよ？　ぜったいいくからね！　ふしぎなことされっぱなしで、わたしおこってるんだから！

12 それは文句なのかい？

10 （あわてて）文句じゃない文句じゃない！　またあそびにきていいの？　くるからね！

森の奥で、みんなが手をふっている。アリス、手を振り返し、ないている佐藤さんをつれて、歩き始める。

10 あっやべ。この森の名前を聞いとけばよかった！　だって名前をしらなきゃGoogle マップで検索かけらんないじゃん！　あーやっちまったよ！

6 ほわほわのぷりぷり。

10 えっ？

6 ほわほわっていう森の、ぷりぷりっていう場所。

こねこ、どこかへいってしまう。

10 きこえた？　さとうさん？　ほわほわのぷりぷりっていうんだってこの森。あかるいときに、またぜったいこようね！

11 うう。アリス、寝ればなおるからね・・・。

森の外まできて、アリスが森にむかって手を振る。
みんなが手を振り返す。

おしまい

わけで、食べたらまたもどってくるから。またねー！

仔猫　どこかへ行ってしまう。

10 どいつもこいつも、いいかげんすぎる！　まったく、脚本が悪いんじゃないの！？　おいこら！　こんなヘンテコな脚本だれが書いた！

山本卓卓がそこにいる。

4 やあ。

10 だれ？

トランプの女王がそこにいる。

12 この人は脚本家さ。

10 きゃくほんか？　この人が？

12 そうさ。そうだろ？

4 うん。

12 あんた、この森に来たからには脚本の文句いうんじゃないよ。こんど脚本の文句いったら首をはねるからね。

10 はあ！？　なんでそんなことされなきゃなんないの！？　言論の自由はないの！？　おかしいじゃんそんなの！　文句いっただけで首をはねられるなんて、そんなのぜったいにまちがってる！　そんなの、ジョージ・オーウェルの「１９８４」の世界観だよ！　法律はどうなってるの！？

12 あんたなんにもわかってないのね。この森の法律は、このわたしなの！　ねえ卓卓さん！？

4 うん、そう。

ウサギとピカチュウがやってくる。

1 女王さまー！

2 たいへんです！　アリスがここにやってきます！

12 もう来てるよ。

1と2 えーっ！？

10 よっ。

1 ・・・よっ。

2 ピカチュウ・・・。

12 ふんっ、まったくいいかげんね。わたしはアリスに１０まんボルトって言ったのに。佐藤功気さんにあびせてどうすんの。

2 ごめんなさい。

10 えっ！？　ちょっとまって！　わたしに１０まんボルトくらわせようとしてたの！？　えーっ！　ありえない！　１０まんボルトって、

人間にくらわせて大丈夫な電力なの！？　いやいや、ぜったいよくない骨がみえちゃう骨がみえちゃう、えーっ！　なんでそんなことするの！　それってあんまりじゃない？　あまりにあんまりで、あんまりいい気分じゃないよ！

12 じゃあもうこのさい正直にいうよ。うちらはね、あんたにこの森にきてもらいたくなかったのさ。ねえ卓卓さん！？

4 うん、そう。

10 ええ！？　なんでそんな、そんなのって排他的よ！　めっちゃ排他的！

12 だってあんた、文句ばっかりじゃない。さっきも脚本に文句いった。それにあんたって、すっごい、わたし以上に、わがままじゃん？　わたし以上にわがままな人はこの森にはいらないの。ね、卓卓さん！？

4 そうそう。

10 わたしの性格のせいで、わたしを排他しようってのね。わかった。がまんする。わたし、文句を言ったり、わがままをがまんする。それならどう？

12 ほんとにがまんできるのかねえ？

10 できる。

12 ぜったい？

10 ぜったいがまんする！

12 じゃあがまんしてみなさい！　アリス！　あんたにこの不思議、がまんできるかな！

不思議なことがたくさんおこる。まずとってもニコニコなバイクがアリスの目の前に現れる。

7 ヤッホー！　バイクだよーん！

10 ババババ、バイクがしゃべってる！　なん・・・

トランプの女王の目がキラリとひかる。

10 なんか、いいかんじー！　ニコニコのバイク、いけてるー！

7 ありがとー！

とってもうるさい車があらわれる。

8 うるさいだろ？　うるさいな？　な？

10 （耳をおさえている）ううう、う、う・・・

トランプの女王の目がキラリとひかる。

10 う、海沿いの、街を、こんな車でドライブしたいなあ！

10 もっと奥、もりのなかにみみをすませて！

11 （森の奥にみみをすませる）

2 ピーカーチュー！！！（でんきしょっくをあびせる）

11 わわわああああ（しびれる。きぜつする）

10 ちょっとさとうさん！　さとうさん！　ねえおきてよ！　どうしたの！

仔猫がやってくる。

6 どうしたの？　おねえさん。

10 あのね、じつはね・・・え！　ねこ！？　ねこがわたしにしゃべりかけてんの！？　えーっ！　まじー！？　えっあんた、ほんとにねこ！？　そんなわけないよね！？　えっねこなのー！？

6 そ。わたしねこ。しかも仔猫。

10 うそだ！　にゃんて言わないじゃん！　ねこはにゃんて言うじゃん！　仔猫ならなおのこと、ぜったいにゃんて言うじゃん！

6 おねえさん、偏見をもっているのね。にゃんて言わないねこだっているの。・・・にゃん。

10 あ、いまにゃんて言った！　ほらにゃんて言った！

6 いまのはサービス。サービス精神があるの、わたし。

10 へえ。じゃあそのサービス精神でたすけてほしいんだけど。この人、さとうさんて言うんだけどね、わたしのことここにつれてきたのにしびれてきぜつしちゃったの！　もりのまったただなかでしょここ。もりのまったただなかつれてきて、道にまよって、それできぜつするってどういうこと！？　プランニングがぜんぜんできてないよね！？

6 プランニングってなに？

10 プランニングっていうのは、つまり計画性ってことなの。計画性がぜんぜんないのこのひと。

6 わかった。じゃあそのけいかくせいのあるひとをつれてくればいい？

10 いるの！？　けいかくせいのある人が！？

6 うん。ちょっとまってて。

こねこ、芸能人をつれてくる。

13 やあどうも。

10 だれ？

13 えっきみ、ぼくをしらない？

10 しらない。

6 このひと、げいのうじんなの。

10 げいのうじん？

13 そ。ぼく芸能人。みたことない？　ほら、ちゃんとみて。おもいだして。

10 んと、げいのうにきょうみがないから、げいのうじんにもきょうみないね。

13 （きずついている）

6 ねえげいのうじん？　けいかくせい　ある？

13 計画性？　もちろんあるよ。分刻みのスケジュールをこなしてるからね。

6 じゃあこのひとをたすけてあげて？

13 このひと？

10 さとうさんていうの。もりの奥にみみをすませたらきぜつしちゃったの。

13 なるほど。てことはつまり、もりの奥に彼をたすけるためのこたえがあるはずだ。よし。これでかいけつだ。じゃあね。

10 えっどこいくの？

13 さつえい。いったでしょ？　ふんきざみのスケジュールなんだ。わるいけど。

げいのうじん、行ってしまう。もりの奥から声がきこえる。

3 ライダーキック！

5 さかたおさむお兄さんです！

7 ぶーーーん！

8 ぼぼぼぼ。

9 ぴっぴかぴー！

4 ふはははは！

10 ねえねえ聞こえてる？　こねこさん、もりの奥から、声が・・・。

6 いってみる？　わたしがあんないしてあげる。ついてきて。

きぜつした佐藤さんをその場に残して、アリスと仔猫は森の奥に入っていく・・・。森の奥に進み、仔猫とアリスはすっかり道に迷ってしまう。

10 ちょっとまってちょっとまって！　仔猫さん、ひょっとしてだけど、ひょっとして、えっ、えーっ！　ひょっとして、えっ！　えーっ！　ひょっとして、み、道に、まよったんじゃない？

6 にゃ・・・にゃん。

10 ひ、ひえー！　さっきあんなに自信満々についてきてって言うからついてきたのに！

6 ごめんなさいアリスさん。わたしちょっと一回、離脱させてもらいますね。

10 えっ！　えーっ！　離脱？　このタイミングで！？　なんでなんで！？　おかしいおかしい！　森の奥につれてきて、ひとり、置いてけぼりにするの！？　理由がわかんない！

6 あのね、ぷっちゃけ、ちゅ〜るの時間なの。ほらわたし、ニコニコな仔猫じゃん？　ちゅ〜る食べないと、シナシナになっちゃうの。ニコニコでいるために、ちゅ〜る食べないとならないの。じゃ、そういういね。

「ほわほわのぷりぷり」

作　山本卓卓（やまもと すぐる）

登場人物（とうじょうじんぶつ）

メンバー

1・・・とってもハッピーなウサギ
2・・・いいかげんなピカチュウ
3・・・めちゃくちゃつよいライダー1号（ごう）
4・・・めちゃくちゃよわい山本卓卓（やまもと すぐる）
5・・・とっても元気（げんき）なさかたおさむお兄さん
6・・・とってもニコニコな仔猫（こねこ）
7・・・とってもニコニコなバイク
8・・・とってもうるさい車（くるま）
9・・・いつも笑（わら）ってるピカチュウスタッフ
10・・とってもわがままなアリス
11・・涙（なみだ）が止まらない佐藤功気（さとう こうき）さん
12・・とってもこわいトランプの女王（じょおう）
13・・めちゃくちゃ弱（よわ）い芸能人（げいのうじん）

もりのなか、アリスと佐藤功気（さとう こうき）さんがみちにまよっている。

10　ちょっと佐藤（さとう）さん！　もしかして道（みち）にまよっちゃったんじゃないの？
11　（ないている）ごめんなさい・・・。
10　かんべんしてよね！　わたしのじかんは有限（ゆうげん）なのよ！　あなたがついてこいって言うからついてきたのに！　道にまようんならさいしょからついてこいなんていわないでよ！
11　うぅ・・・ごめんなさい・・・。
10　まったくもりのまっただなかじゃないの！　もっとちゃんとプランニングしてちょうだい！

もりのおくから、こえがきこえる。

1　ハッピー！
10　いま、なんかきこえた。
1　ハッピー！
10　さとうさん、きこえてる？　いま、もりのおくからハッピーって聞こえた。
2　ピーカーチュー！！！
10　えっ？　聞こえた？　こんどはピカチュウって聞こえた。ねえ、聞こえない？　さとうさん？
11　（泣きながら耳をすませて）きこえません。

あとがき

木々は緑に芽吹き、間もなく真っ赤なバラが咲く季節も訪れるというのに、「生産性」などという狭い尺度で人間が測られ殺されてしまう、相変わらずなんともザンネンなわたしたちの世界です。一部の人間の「異常性」のせいにして退場させても、社会の価値観が相変わらずだから、すぐにまただれかに殺させてしまう。

今回の企画に参加してくれたのは、旭区地域自立支援協議会の仲間たちです。10〜20名の障害がある人たちが通い、日中を過ごす「生活介護」「就労支援」「地域活動支援センター」などの事業所で、旭区だけでも50ヶ所以上、全国には2万ヶ所以上あります。かつて事業所での作業は部品組み立てなどの内職的な下請けが中心でしたが、飲食業や自主製品の製作など多様になりつつあります。それなのに、障害に対する価値観はまったく多様にはできていなかったのではないか——。すぐ隣の市で起きてしまった「津久井やまゆり園事件」が、そんな問いをわたしたちに突き付けてきたように思います。だから、わたしたち協議会のネットワークでは、つながることで満足するのではなく、「一人ひとりを肯定する」という次なる目標を掲げたのです。
すなわち今回の企画は、新しい価値観を創出して「一人ひとりを肯定する」わたしたちのネットワークによる試みの一つのかたちです。「生産性のない人間は価値がない」なんてなんともザンネンな呪いの言葉を、笑いながら踏み越えて行けるんじゃないかと思えるほどに愉快な実施報告が各所から寄せられました。

アーティストからも「作品や発表だけが「成果」ではないことを理解のうえ、発表目的ではないワークショップをさせてくださったのはアーティストにとっても、とてもよい時間となっていたと思っています」（白神ももこさん）や「「むくどりの家」でやらせてもらってる活動で、自分のこれまでの活動を救ってもらっていると思っていますし、僕のこれからの活動にも大きな影響を与えられると思っています」（岩井秀人さん）と、生産性に縛られない今回の企画に対するうれしい反響が伺えました。

アーティストや参加者の方たちの豊かな経験の裏には、コロナの中でも日常を守る障害福祉事業所の人たちの地道な取り組みがありました。徹底した感染対策やPCR検査など工夫を凝らし、それでもなお度重なる中止に見舞われるも倦まずに再調整してくれました。実施後に参加者が「陽性」と発覚しても、迅速な対応により最小限の拡散に収めてくれただけでなく、そこで歩みを止めずに継続してくれた施設の度量には感服しました。「組織のメンツ」とか「法人の責任」みたいなことを第一義にすれば、「余計」なことはしないスタイルもあるんでしょう。それでも、いずれの事業所もメンバーさんたちの日常を少しでも豊かにするべく、細心の注意を払いながらひらきつづけてくれました。
50ヶ所／2万ヶ所のなかのわずか6ヶ所と言えばそれまでですが、まずは6ヶ所とも言えます。ここから変え始めていければよいのではないでしょうか。福祉施設でのアーティストによるワークショップを全国に広めていくために、この本をあなたに届けます。

本企画ワークショップを実施したアーティストの「振り返り」を、カプカプのYouTubeチャンネル「カプカプテレビ」で近日公開予定！カプカプテレビのチャンネル登録お願いします。

▼カプカプテレビURL
https://www.youtube.com/channel/UCsgILW0-j63GTLaCBxrsshA

※これは、3月にオンラインで行なわれた振り返りトークの映像を編集したものです。
26日（土）9時〜11時　出席者:白神さん、益山さん、山本さん
27日（日）14時〜16時　出席者:アサダさん、新井さん、岩井さん